令和４年度
ユニットフロア目標
中間報告

腰痛予防対策について

介護作業者の腰痛予防対策チェックリスト（厚生労働省より）を用いてリスクの把握を行う。

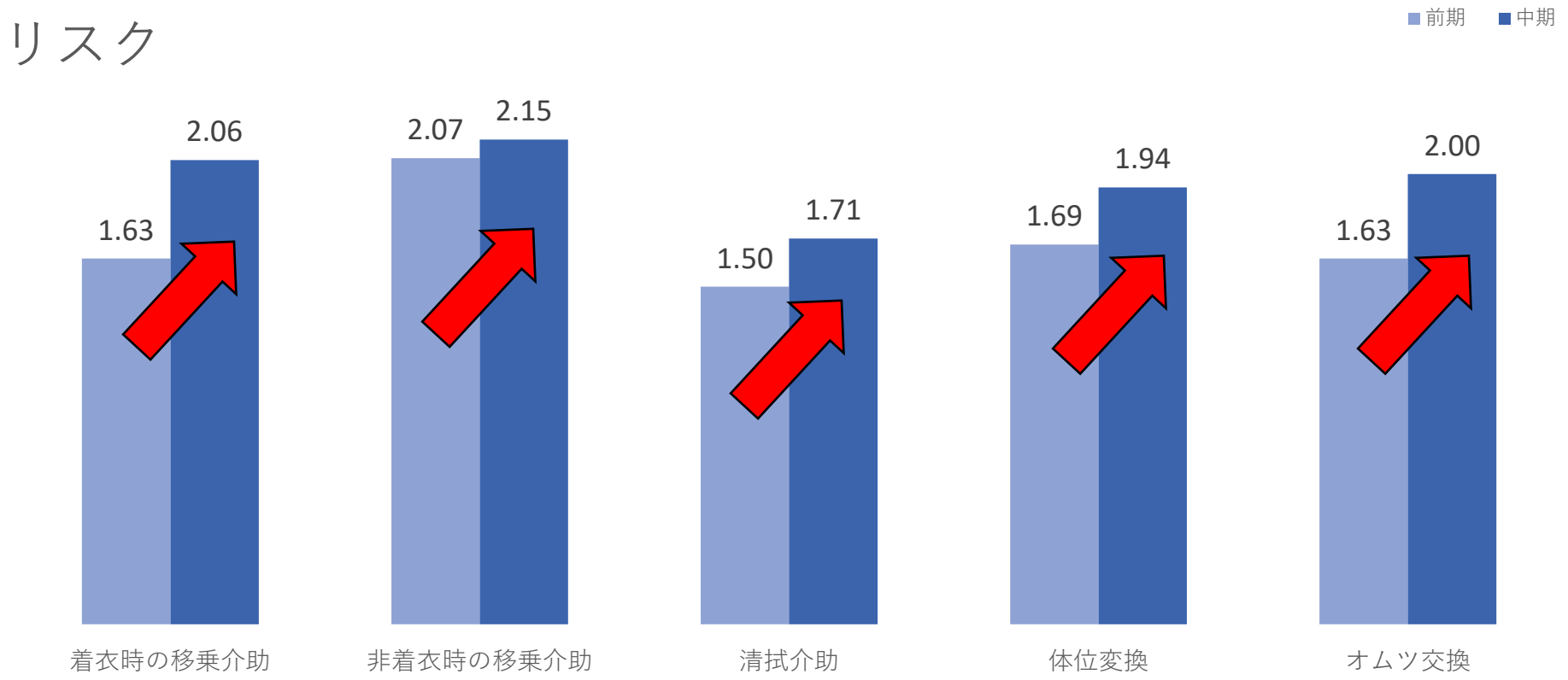
【リスク】（例）

それぞれの介助作業でのレベル「ａ」、「ｂ」、「ｃ」の組合せによりリスクの程度を見積り、リスク低減対策の優先度を決定します。次の表は、その一例です。

リスク	評価の内容	評　価
高	「ａ」の評価が２個以上含まれる	腰痛発生リスクは高く優先的にリスク低減対策を実施する。
中	「ａ」の評価が１個含まれる、又は全て「ｂ」評価	腰痛発生のリスクが中程度あり、リスク低減対策を実施する。
低	「ｂ」と「ｃ」の評価の組合せ、又は全て「ｃ」評価	腰痛発生のリスクは低いが必要に応じてリスク低減対策を実施する。

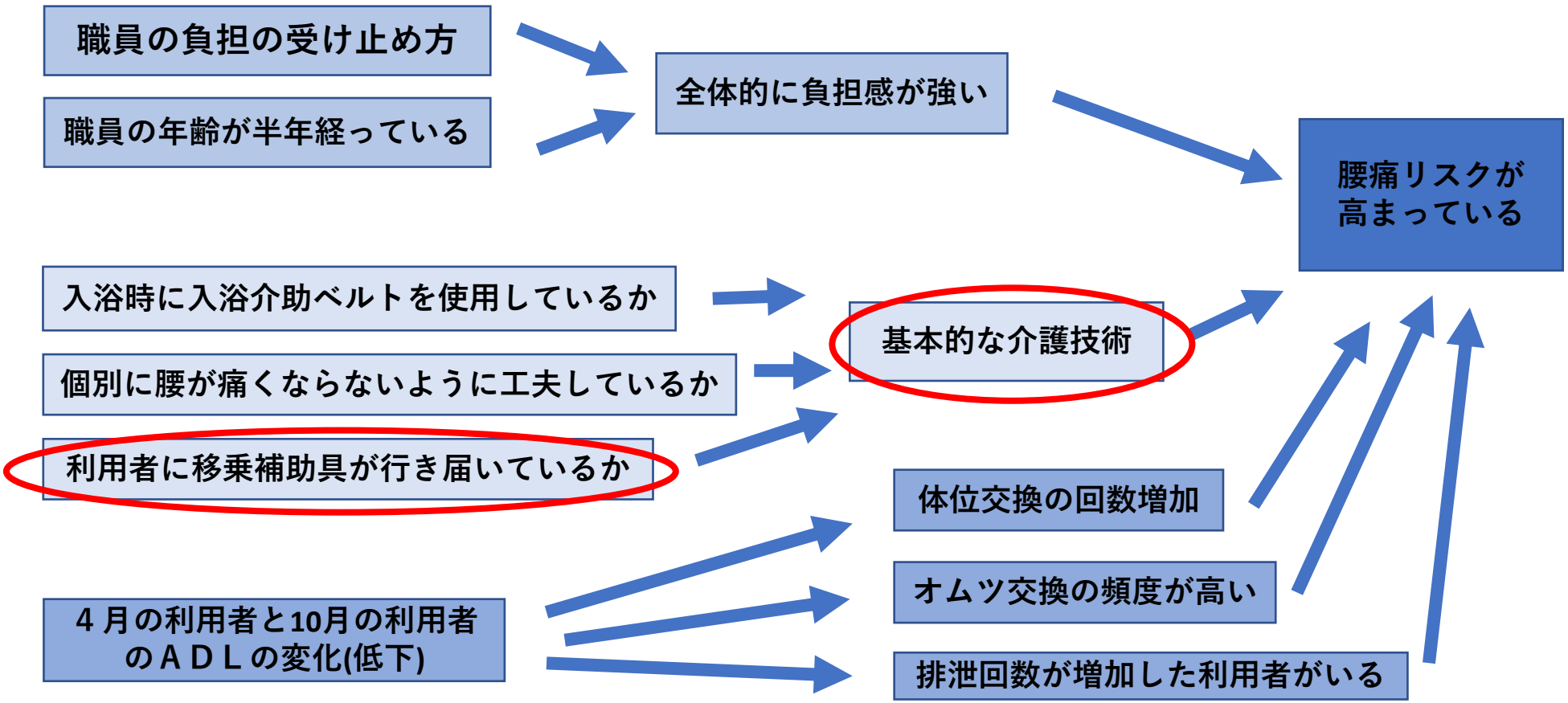
集計のため、リスク　高＝3
中＝2
低＝1　と置き換える

チェックリストの結果



チェックリストの結果より全体的に負担感が強くなっており、腰痛リスクが高まっている。

因果関係図を作成し、原因究明を行う



腰痛アセスメント因果関係図

リスクが高まったことについて考えられる要因

- 移乗介助の方法はどうか。必要な利用者に移動補助具が行き届いているか。腰が痛くならない工夫をしているか。
- 体位変換時やオムツ交換時などベッド高さを調整しているか。
- 基本的な介護技術が施行されているか。
- 利用者層が大きく変わってはいないのではないか。
- 職員の負担感の受け止め方が変わっている？職員の年齢含め
- 排泄の回数が増えている利用者がいることで、負担感が強い。
- 体位変換、オムツ交換の頻度を変えられないか。
- 入浴時に入浴介助ベルトを使っているか。
- ADLは４月から比べて変化しているか。

リスクが高まったことへの対策

- 改めてスライディングボードなどの移乗補助具の使用方法を勉強会を開催する。
- ベッド高さの調整を行う。
- 基本的な介護技術の見直しを行う。
- 移乗補助具を使用していない人、している人の判断があいまいなため、介助者によっては移乗補助具を使用していないケースがある。→根拠をつくり、利用の明確化をする。